

(16) 食用ギク(コギク)

主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
白さび病 (<i>Puccinia</i>)	<p>①親株は無発病株を用いる。 ②被害葉はかきとて適切に処分する。 ③施設栽培では、マルチなどによって過湿を避ける。 ④草勢を良好に保ち、肥料不足や窒素過多を避ける。</p> <p>【参考事項】 品種により発病に差がある。 雨よけ栽培では6月の梅雨期や9~10月の秋雨の時期に発生が多くなる。 施設栽培では晩秋から春にかけ施設を閉め切った時間が長くなる時期に発生が多い。 最低気温が25°C以上の盛夏期には、ほとんど発生は見られない。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。 (例) クレスキシムメチル水和剤(ストロビーフロアブル) ペンチオビラド水和剤(アフェットフロアブル) ポリオキシン水溶剤(ポリオキシンAL水溶剤「科研」) ミクロブタニル乳剤(ラリー乳剤)</p>
褐斑病 (<i>Septoria</i>)	<p>①被害葉はかきとて適切に処分する。</p> <p>【参考事項】 摘心直後の降雨は発生を助長する。 露地栽培では発生しやすいが、施設栽培では発生が少ない。 育苗中の発病苗が伝染源となる。</p>	<p>①発病が見られるほ場では、摘心後から農薬を散布する。 (例) クレスキシムメチル水和剤(ストロビーフロアブル) チオファネートメチル水和剤(トップジンM水和剤) TPN水和剤(ダコニール1000)</p>
ミナミキイロアザミウマ	<p>①未発生施設では苗の移動に伴う持込みに注意する。 ②施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットや0.8mm目合いで赤色系ネットを張り、侵入を防止する。 ③収穫の終わった株など、不必要的株、花及びほ場内の雑草は本種の発生源となるので、速やかに処分する。 ④マルチ栽培は土中での蛹化防止に効果がある。 ⑤シルバーマルチを、通路を含めた全面に張る。 ⑥施設周辺の雑草にも発生するので除去する。 ⑦発生施設では収穫後密閉し、高温にして殺虫する。 ⑧青色の粘着板で捕殺し密度を下げるとともに発生予察を行う。</p> <p>【参考事項】 ナス、ピーマン、キュウリ、トウガラシ、スイカ、メロン、ホウレンソウなどに発生が多いので、近くではできるだけ栽培しないようにする。 トマト黄化えそウイルス(TSWV)を媒介する。</p>	<p>①定植後、低密度時から農薬を丁寧に散布する。 (例) アセタミブリド水溶剤(モスピラン顆粒水溶剤)(アザミウマ類) クロルフェナビル水和剤(コテツフロアブル) スピネトラム水和剤(ディアナSC)(アザミウマ類) フルキサメタミド乳剤(グレーシア乳剤)(アザミウマ類)</p>
ミカンキイロアザミウマ	<p>①未発生施設では苗の移動に伴う持込みに注意する。 ②施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットや0.8mm目合いで赤色系ネットを張り、侵入を防止する。 ③収穫の終わった株など、不必要的株、花及びほ場内の雑草は本種の発生源となるので、速やかに処分する。 ④マルチ栽培は土中での蛹化防止に効果がある。 ⑤シルバーマルチを、通路を含めた全面に張る。 ⑥施設周辺の雑草にも発生するので除去する。 ⑦発生施設では収穫後密閉し、高温にして殺虫する。 ⑧青色の粘着板で捕殺し密度を下げるとともに発生予察を行う。</p> <p>【参考事項】 本種は花弁や芽の隙間に生息しているため、農薬は丁寧に散布する。 トマト黄化えそウイルス(TSWV)、キク茎えそウイルス(CSNV)を媒介する。</p>	<p>①生育期に粒剤を施用する。 (例) ニテンピラム粒剤(ベストガード粒剤)</p> <p>②定植後は、低密度時から農薬を頂芽にもかかるよう丁寧に散布する。 (例) アクリナトリン水和剤(アーデント水和剤) アセタミブリド水溶剤(モスピラン顆粒水溶剤)(アザミウマ類) エマメクチン安息香酸塩乳剤(アファーム乳剤)(アザミウマ類) スピノサド水和剤(スピノエース顆粒水和剤) フルフェノクスロン乳剤(カスクード乳剤) フロメトキン水和剤(ファインセーブフロアブル)(アザミウマ類)</p>

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
アブラムシ類	<p>①施設の開口部に目合い1mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。 ②施設周辺の雑草を除去する。</p>	<p>①アブラムシ類が多発する作型では、定植時に粒剤を施用する。 (例) ジノテフラン粒剤（スタークル粒剤、アルバリン粒剤） ②増殖が速いため、発生を見たら直ちに散布する。 (例) アクリナトリン水和剤（アーデント水和剤） アセタミブリド水溶剤（モスピラン顆粒水溶剤） イミダクロブリド水和剤（アドマイヤーフロアブル）（施設栽培） フロニカミド水和剤（ウララDF）</p>
	<p>【参考事項】 ワタアブラムシ、キクヒメヒゲナガアブラムシなどが寄生する。 ワタアブラムシは、有機リン剤などに抵抗性を示す場合がある。</p>	
マメハモグリバエ	<p>①施設開口部に目合い0.8mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。 ②幼虫の食害痕の有無をよく観察し、本種が発生していない苗を定植する。 ③マルチ栽培は土中での蛹化防止に効果がある。 ④発生源となるほ場周辺の雑草は除去する。 ⑤改植時、土壤消毒（太陽熱）により蛹を死滅させたり、蒸込みにより成虫を死滅させる。</p>	<p>①定植時に粒剤を土壤混和する。 (例) ジノテフラン粒剤（アルバリン粒剤、スタークル粒剤） ②発生初期から農薬を散布する。 (例) シロマジン液剤（トリガード液剤）（ハモグリバエ類） フルフェノクスロン乳剤（カスケード乳剤）</p>
	<p>【参考事項】 本種は幼虫が葉内を穿孔加害して不規則な線上の被害痕を残す。成熟した幼虫は葉を脱出して土壤中で蛹化する。 雌成虫の産卵痕・摂食痕は、葉上に直径1mm程度の白い斑点となり残る。 寄生範囲は極めて広い。</p>	
ハスマンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジョトウ、ヨトウムシ	<p>①施設の開口部に目合い4mm以下の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。 ②ヨトウムシ、ハスマンヨトウ、シロイチモジョトウの孵化直後の幼虫は集団で加害しているので、捕殺する。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。農薬によって対象病害虫が異なるので注意する。 (例) クロルフェナピル水和剤（コテツフロアブル）（オオタバコガ） シペルメトリン乳剤（アグロスリン乳剤）（オオタバコガ、ハスマンヨトウ、ヨトウムシ） ビリダリル水和剤（プレオフロアブル）（オオタバコガ） メトキシフェノジド水和剤（ファルコンフロアブル）（ハスマンヨトウ） レピメクチン乳剤（アニキ乳剤）（オオタバコガ、ハスマンヨトウ） ②微生物農薬を利用する（微生物農薬の項参照）。 (例) BT水和剤（デルフィン顆粒水和剤など）（オオタバコガ、ハスマンヨトウ、シロイチモジョトウ）（野菜類（トマト、ミニトマトを除く））</p>
	<p>【参考事項】 8月からの発生が多く、葉、蕾、花を加害する。 オオタバコガ、シロイチモジョトウは、若齢幼虫が新芽部分に食入して加害する。 老齢幼虫になると農薬の防除効果が劣るので、早めに散布する。</p>	
ハダニ類	<p>①発生源となるほ場周辺の雑草は除去する。 ②多発した場合、改植時に施設内の植物を全て除去し、1週間程度密閉する。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。 (例) アセキノシル水和剤（カネマイトフロアブル） シエノピラフェン水和剤（スターマイトフロアブル） シフルメトフェン水和剤（ダニサラバフロアブル） 脂肪酸グリセリド乳剤（サンクリスタル乳剤、アーリーセーフ） (野菜類（なす、トマト、ミニトマト、しゅんぎくを除く）) プロビレングリコールモノ脂肪酸エステル乳剤（アカリタッチ乳剤） (野菜類) ミルベメクチン水和剤（コロマイト水和剤） ②天敵製剤を利用する（天敵製剤の項参照）。</p>
	<p>【参考事項】 ハダニ類は農薬に対する抵抗性がつきやすいので、異なる系統の農薬をローテーションで散布するとともに、天敵農薬を利用して発生量を抑える。</p>	
ネグサレセンチュウ	<p>①対抗作物（マリーゴールド、ハブソウ）を栽培する。 ②夏期高温時にハウスを密閉して湛水処理する。</p>	<p>①定植前に土壤消毒を行う。 (例) D-D剤（D-D、テロン）</p>
	<p>【参考事項】 対抗植物を栽培する場合は、根量を十分に確保することが防除効果を高めるポイントであるので、十分な栽培期間を確保する。また、対抗植物は、品種、系統により効果に大きな差があるので、防除効果の高い品種を選定する。</p>	